

第9の縁 (3)日比の伯父による

私が小学校卒業後、師範学校に入学するまでの丸1年余の間に、日比の伯父より受けたものは、まことに絶大というべく、ある意味では、その一年有半の間に、人間としての一生の基盤的なるものを与えられたと言ってもよい。そしてそれは具体的には、次に述べるように、人間最下の最具体的な嗜みである上に、しかもそれを数え年16、7という、人間としての基礎形成の年齢において授けていただいた事である。しかもさらに、文字通り伯父の膝下と言うべき校長室の一隅にあって、給仕として教えていただいたことである。それゆえ私にしては、もし (if) この1年半の「給仕時代」のななかつたならば、その後の私の人生は大きく変わったものとなっていたであろう。

今試みにそのうちの1つ二つを挙げてみると、第一に私は履歴書の書き方を教えられた。それには少なくとも5、6度は書き直しを命ぜられたようであった。おかげでそれ以後履歴書については困った事はなかった。さらにまた封筒の書き方なども、伯父が知多郡の第一部落の会長をしていたために、常に多数の封筒を書かなければならず、大いに実地練習の機会があったことである。

しかしそれらとは比較にならぬほど辛かったのは、小学1、2年生の教室の掃除をやらされたことであって、これはそれまで、「秀さ」という猿に似た愛嬌者の小使いのしていたことであつたが、今やその一部が私に廻されてきたわけであって、全校卒業生中の最優秀の卒業生として卒業した私が、卒業と同時に「秀さ」校番の配下になったようであった。

そしてこの感の最も深刻であったのは、広大な運動場で、千何百人という全校生に対して、号令をかけてきた私が、今や卒業と同時に一転して、「秀さ」校番の下手になってしまった観で見られたことであって、この感は年頃の女子組が、今や朝会を終えて広い運動場から、整然と隊伍を組んで教室に向かうときなどには、ひとしお身に染みて痛感したことである。されどもその間の体験は、後年私が逢遇した諸々の人生の悲痛に際して、よくそれらに耐えてきた最有力な教訓であったとすることができる。すなわち、もし (if) というこの岐路の、いかに有効であったことかを70余年の後の今日、新たなる感慨をもって思い出さざるをえないのである。

されど私が、日比の伯父より与えられたものは、ひとり如上には尽きない。例えば私が岡田虎二郎先生の偉容に接することができたのも、また師範入学前に於けるこの「給仕」時代にあったのである。それはそのころ伯父は「実業の日本」誌上、その令名の天下を「席卷」した岡田式静坐法の大家であった岡田先生を尊信し、町内の有力者たちと相談して、ついに同先生を招聘にすることになったのである。もちろんそれは有料であって、かなり高額の会費であったであろう。しかし私のごとき一給仕の分際では、もちろん正式には入会など出来るわけもなく、しかし給仕の身分の身軽さに、ちらちらと会場の様子を垣間見ている事はできたのである。同時に傍ら書物を求めてその概要をつかみ、かくして私の得たる結論としては、①毎朝晩各分宛ての静坐は、私のごとき寝坊には到底可能であった。②よって私としては、朝夕2度の「静坐」の代わりに、終日、いやしくも目覚めている限り、腰骨だけは曲げぬように……。という私の「立腰道」の主張は、すでにここに始まったと言っているだろう。それゆえ（if）もし私が日比の伯父によって、師範入学前の1年有半の歳月を、伯父のもとで給仕でなくて、代用教員などになって得意にでもなっていたならば、到底今日の私はあるべくもなかったであろうと言える。ここにおいて現在の私としては、神天の御導きを深刻に感ずるわけである。